

佐伯鶴城高校の校歌について

武 田 剛

(会員 佐伯市木立)

佐伯鶴城の校歌がたった一字の事でたいそうもめています。たいした事ではないと云えばそれまでですが、やはり佐伯の歴史の一面を物語っている気がしますので、私の考えを書いてみたいと思います。

鶴城の校歌は前の佐伯中学校の校歌で、仲々格調の高い歌詞と荘重なメロディの名歌ですが、何しろ軍国主義が台頭する大正の終り頃つくられたものですから、歌詞に「武を練り」とか「神武の帝東征の」とか「神の御稔威のいちじるく」などの軍国調で、神がかったところがあります。

敗戦後中学校と高等女学校が統合して高校になったとき、校歌をどうするかが大きな懸案となり、それを決める生徒大会では、新しい校歌を、中学の校歌を、女学校

校歌

（佐伯市木立）

山登舞鶴に似たりと
 貞正の徳に
 自給と信愛剛健の
 理想に燃ゆる若人
 日長校を練り文と使

香正川の遠道として
 佐伯の湯にたると
 ミダの嶋の鳥がく
 行き支子舟の真帆片帆
 煙の波や堂の波
 詩趣豊かさを眺め

大入島にその昔

神武の帝東征の

小船繫がせ居まうし

巨巖をかて今もなほ

神の御稔威の著く

みまの古井清水清く

かゝる自然に育まれ
 かゝる風流に鑑み
 健児の前途は見果
 城山の松馬場の松
 風になうまう雲と呼ぶ
 雄々姿これとん

の校歌をと云う議論が白熱して結論が出ず、そのあとの教職員会議で『中学の名校歌を捨てるにしのびないので、せめて軍国主義の象徴たる「武」を「技」にかえて中学校歌を継続する』と決定しました。幸いなことに歌詞に「佐伯中学校」と云う校名が無かったのが、女学生にも受け入れ

易かったのでしょうか。武を技にかえたことに生徒や卒業生から抗議はまったく無く「校歌が残ってよかった」と云うよろこびの声が多かったと聞いております。

私も敗戦のあくる年中学を卒業したばかり、弟妹が在学していましたのでPTAで学校に出入りし恩師の有馬、梅木、横川、岡田の諸先生方には自宅に出入りさせて頂き、その間の事情を聞くことが出来ましたが、何よりも先生方は教え子を戦場に送り戦死させた事を悔いておられ、特に学校の正門近くの防空壕がB29の爆弾でやられ四十人が死亡、飯沼先生のご家族や本校生徒も一人犠牲になり、その遺体を近くのお寺に運んだりしたので、武に懲りて技にしたと伺いました。その時中学本館の右半分も爆弾でふっ飛びました。もし授業中だったらと今でも慄然とします。

又戦時中勇ましい校歌を歌う背景には次の様な「武」がありました。学校の授業に教練と云うのがあり、陸軍将校が二人も配属されていて軍隊さながらの軍事教練と精神教育を行っていました。軍人勅諭なども暗誦させられたものです。現在の生徒諸君には信じられないでしょうが、校内に兵器庫があり本物の銃がずらっ!!と並び、

その銃で実践さながらの訓練をしていたのです。「武を練る」とはこう云う事だったので。教室は航空隊のゼロ戦などが城山すれすれに飛ぶので、爆音で窓ガラスがビリビリ鳴って先生の声が聞き取れない程でした。生徒は足にゲートルを巻いて登下校、上級生には拳手の礼、うっかり欠礼すると鉄拳制裁でした。その上軍の方針で陸士、海兵、陸幼、予科練、特幹を志願せねばおれない様な圧力がかかり、先生方は心ならずも生徒に志願をすすめねばなりませんでした。そのため多くの生徒が志願し戦地に行って沢山の戦死者ができました。

私の兄は志願せず入営でしたがサイパンで戦死しました。死なずに残った者が又ぬけぬけと武を賛美するのを聞くと憤りが湧いてきます。この様に武を練ることは命がけの事でしたから、生徒のみならず教師にとっても重圧で、敗戦でこの重圧からとき放たれた時は「もう武がいらなくなった、召集令状は来ないんだ」と、ほっとしたものでした。

そして戦時中、国賊思想と云われた民主主義、自由主義の本当の意味を学び始めたとき、戦後も学校に居座った軍人教師が相変わらず「文武両道」だ「日本精神」だ

と軍国教育めいた事を云うので、私共の同級生・佐中33、34回生（敗戦で四年卒と五年卒があった）は憤慨して、全員剣道場に立てこもつて「武」の教育のてつ回を求めたのです。ストライキまでして武をきらったのです。要求は認められてその教師は学校を去りましたが、他の先生方は生徒に好意的でただ一人も処分されませんでした。そして私共が卒業したあと高校になった時、先生方は「技」にかえられたのです。

技にかえてからおおよそ半世紀、卒業生は一万五千人を超えたでしょう。この様な数の生徒から技と歌われすつかり定着した校歌に対し、数年前より「技を武にもどせ」と要求する人達が同窓会員の中に現れました。

部活で武と呼べるものは剣道・柔道位、あとは皆スポーツなのに「武にしろ」と云うのは随分厚かましい要求ですから、当然「技のまままでよい」と云う人達と論争が始まり、新聞にも大きく出ました。そう云う状況の中で鶴城の教職員会議はあらためて真剣に検討し、その結果「やはり技のまままでよい」と云う結論を出しました。何しろ校訓の筆頭が「自治」ですから学校にまかせてこれを決すべきですが、「武」派はあきらめず執拗に「武

にもどせ」と云う意見を出して、学校を悩ませ「自治」を侵害しています。

その意見を代表する文書「正しい校歌を歌いましょう」が同窓会の理事会、総会に提出されました。私は理事会でこの文章のあやまりを指摘しましたが、武派は声高に云いつのつて耳をかそうとはしません。私は総務委員長として委員会で一年間に涉つて検討した「進学支援資金制度」を提案し、その承認を見とどけてから役員を辞退しました。つまらん論争にいや気がさしたのが本音です。ところが同窓会の広報誌「馬場の松」に又この文章が載りました。私はこの文をあらためて読んで、健忘症と云うか時代おくれの精神論と平然とウソを書いたのが堂々と公開されたのに驚き、これをそのまま見逃すのは鶴城卒業生の「知性と教養」がこの程度かと思われ、鶴城が右寄りの高校だと誤解されるおそれがあるのと、将来また「武」の教育に逆もどりする糸口になりかねない心配になりましたので、これを徹底的に批判し後世に悔いを残さない様にしたい一念で、佐伯史談に載せて頂く次第です。

その文章は次の通りです。

正しい校歌を歌いましょ

佐伯鶴城高校の校歌は、皆さんが良くご存じのまうに、昭和二十三年、学制改革で佐伯中学校と佐伯高等女学校が合併し、佐伯第一高等学校（現在の佐伯鶴城高校）となりました。その新しい学校の校歌として、それまでの佐伯中学校の校歌を継承したものです。

そのもとになる佐伯中学校の校歌の歌詞は、大正十三年に、当時の第五高等女学校教授であった八波則吉先生が創つて下さったものです。

新しく生まれた学校の校歌として受け継がれたときは、悲しいことにも、米軍の占領下でした。占領軍は、将来の日本が二度と米国の脅威の存在はならないようにと、民族劣弱化をその占領政策としており、歴史教科書

を書き換えさせ、道徳教育を省かせ、柔道や剣道などを学校教育の中で行うことを禁じました。言葉としては「八紘一宇」や「大東亜戦争」という言葉を「公文書の中で」使用することを禁じていました。その中に「武」という文字は含まれていませんでした。けれど、校歌継承の時、当時の学校職員会議は占領軍に配慮したらしく、歌詞中の「武」を「技」に書き換えました。

そして、その後、米軍占領も終わり、民主国家の自由が回復されてからも、一時の方便であったはずの、この歌詞書き換えは顧みられることなく、六十年近く、そのまま、学校側はそれを「校歌」としたままです。

佐伯鶴城同窓会では、

平成十三年に、「母校の校歌を正しいもの」にし、現在発行している「同窓会会員名簿」に、その正しい校歌の歌詞を載せています。また平成十六年から十七年にかけて、各地の同窓会とも、それぞれ総会で正しい歌詞のもの、「母校校歌」と決めて

いささかでも知性や教養のある人なら、著作権に敬意を払うのは当たり前のことです。鶴城高校の校歌の作詞者を「八波則吉」と銘打つが、

原作に従うのが当然です。どうしても、「技」でなければならぬと考えるなら、「原作・八波則吉 変詩者・何某（詩文中「武」とあったものを「技」に替える）」とするのが原作者への礼儀というものです。

それに、日本語には「わざを競う」とか「わざを磨く」という使い方はあっても「わざを練る」という言い方はありません。まして「ギを練る」などと音読みは滑稽です。ウソ歌の校歌は心ある人々から嘲笑されています。さらに付け加えますなら、「武」とは「戈を止める」という意味の文字です。このことは、今から二千五百年ほど昔に書きとめられた「左氏春秋」という古典にも載っていることです。「武」という文字は「侵略」や「暴力」などというものは正反對の意味のものです。校歌の中にあるのを忌避しなければならぬ文字ではありません。

「文武両道」とは、単に「学業成績に優れ、スポーツに強い」という意味だけのものではなく、「古典から、人間とは如何にあるべきか、社会は如何

にあるべきか」を学び、知行合一、その学んだことを実行できる身体と精神を鍛え上げることを表現する言葉です。より高い人格の形成を目指すものです。

また、「文」という文字も、「文・武」と組み合わせられてこそ「学問」という意味になります。が、「技」との組み合わせでは「文章」という意味にしかありません。百歩譲って「わざを練る」という言葉を認めたととしても「文を練る」は「文章を書き直し書き直し」「文案を練る」といった意味にしかならないと解するのが常識だろうと思います。「正しい校歌を歌いましょ」と、私たちは佐伯鶴城高校の関係者に呼びかけています。ご理解と協力をお願い申し上げます。

正しい佐伯鶴城高校の校歌を愛する会

戸田 信芳
他 有志

この文を読んで私が不思議に思った事から書いて批判に入りたいと思います。

まず、戸田氏や会員の皆さんは「技」にかえた時なぜ抗議せず沈黙していたのかと云うことです。その時には何も云われなくて、つまり同意か黙認していて今頃になって「おかしい」と云うのは理解出来ません。反動と云われるのがこわくて何も云わず、右寄りが元氣を出す世相になると「武にもどせ」と云い出すのは卑怯でしょう。

も一つ不思議なことは、アメリカは「日本の民族劣弱化を占領政策とした」と書いておりますが、ヒットラーがユダヤ人にした様なことをアメリカは日本にしたのでしょうか。日本の自由と民主はアメリカの占領政策がなかったら育たなかつたでしょう。戸田さんが国粹主義者なら何をか云わんやです。

そして「武にもどせ」と云う一番の理由に「原作尊重」と「文法上おかしい」と云うこともあげていますが、何かえざるを得なかつたのか、前述の様に武を強制され敗戦と云ういまだかつて無い苦難の時代的背景と、中・女学校統合と云う困難に直面した教師の苦悩と決断

には何も配慮していません。

当時の先生方は原作を尊重することや、文法上の問題に気がつかない程お粗末な教師だったのでしょうか。当時の教師だった有馬先生は国漢の権威で佐伯市歌をつくられた人です。梅木先生も国漢で中国文学にくわしく、佐伯文庫の研究では六冊も出版されています。横川、岡田両先生は地理・歴史の優れた教師と同時に佐中水泳部の生みの親、育ての親の人格者です。

まだまだ立派な先生方が沢山おられたのに、これらの先生方が原作や文法の事を知らなかつたのでしょうか。こんな事は百も承知で技にかえたと思います。技にかえずに何にかえたらいいんでしょう。先生方は佐中校歌を残すため時代に合わない武を技にかえて校歌を救つたのです。校歌を救つた恩人ではないですか。

こう云う先生方の気持ちに対し、戸田さんは「当時の学校教職員は占領軍に配慮したらしく武を技に書き換えました」と書いていますが、たしかめもせず何を根拠にこんなあいまいな事を書くのでしょうか。教え子を再び戦場に送るまいと云う気持で技にかえたのに、占領軍に媚びた様な云い方は恩師を侮辱するものです。

その上その先生方に向かつて「知性や教養がいささかも無い」と云うのは、母校の恩師をほうとくする忘恩の徒の言葉です。

尚師をはづかしているところがあります。それは戸田氏が「ウソ歌は心ある人から嘲笑されています」と書いていますが、これはウソ歌にかえた先生方を嘲笑している事になります。誰が恩師の行為をあざけり笑う人がありますでしょうか。あればその人を知らせてください。「嘲笑」などと云うどぎつい言葉で鶴城関係者をおどすのは止めて頂きたい。

又「武を技にかえたのは一時の方便」とありますが、かえた時その様な付帯条件や決議はありません。ありません。ないのに一時の方便と云うのは「ねつ造」でしょう。

これは私の推測ですが、おそらく学校は原作者側に歌詞変更の了解を求め承諾を得たのではないかと思えます。それ位のこととは当然されたでしょう。なぜなら変更について原作者側から抗議があったと云う事を聞かないからです。八波先生は立派な方ですからお元気でしたら「自分の作詞で大そう迷惑をかけた、すまない。技にかえて残してくれて有難う」と、申されたに違いありません。

私が戸田さんの文を読んで一番びっくりした事は「技を武にもどす」一番の理由に、武が平和を意味するから大丈夫と平気でウソを云っていることです。戸田さんは「武は戈を止めると云う意味で侵略や暴力とは正反対のもの」と書いておられますが、すぐ辞書を引けばわかるウソをどうして、いかにも本当らしくぬけぬけと書くのでしょうか。正反対なら「武力衝突」や「武力行使」はどう説明されるのか。どこの家庭にもある広辞林には「武とは勇ましいこと、戦力、兵力、武器、戦争、軍人」とあります。漢字の成り立ちについての権威、白川静氏の最新の労作「字統」によれば「武は「戈と止とに従う」止は歩の略形、戈を執って前進することを歩武と云う」とあります。漢字の辞書はみな戸田さんの見解と正反対です。武の止は止めるのではなく歩める意味です。どうか辞書でたしかめて云ってもらいたい。

戸田さんは辞書と正反対のことを云って、鶴城関係者を云いくるめるつもりでしょうか。鶴城も安く買われたものです。その上このウソをいかにも本当らしくするために、中国の古典を持ち出し「左氏春秋に載っている」と書いていますが、これが又ウソです。

左氏の春秋は孔子の春秋の様に明確な哲学、思想や主義、主張は無く、唯単に春秋時代の出来ごとを箇条書きにした記録書ですから、左氏が「武は戈を止める意味だ」と定義したものではありません。左氏春秋には「楚の国の莊王は強大な武力は戦争抑止力になると云った」と莊王の發言を記録しているだけです。これをもって「武と云う字は平和を意味する」と解釈するのは大間違いで、中国古典を曲解するものです。ちなみに楚の莊王は平和どころか大軍で晋の国を亡ぼし、そのあと秦から亡ぼされています。

校歌を左右しようかと云う文章に「中国の古典など誰も知らんだろう」とタカをくくってウソをまことしやかに引用し、黒を白と云いくるめようとすると戸田氏や会の人達の神経が理解できない。すぐバレるこの様なウソを根拠にして学校に圧力をかけ、学校がそれに屈して武にかえた場合、もし誰かから差し止めの訴訟をおこされたらどうするんでしょう。学校長は大変な迷惑をこうむります。戸田さんはすべての辞書のてい正を出版社に申し入れなければならないでしょう。嘲笑されるのを覚悟の上で。又逆に戸田さんや会の人が武に戻せと提訴す

ることも考えられますが、時効や原告の適格性からみてむつかしいのではないのでしょうか。

それから私がどうしても見逃せないのが戸田氏が「原作のままが正しい校歌」と云っている事です。正しい校歌と云うのであれば、私は原作の歌詞が日本の歴史や大入島の地勢から見て正しいかどうかとも検証すべきだと思います。

まず「神武の帝東征の」とありますがこれは神話、つまりおとぎばなしであって歴史的事実ではありません。現在の日本史で明らかに天皇が存在したと証明されているのは、いわゆる二十六代の継体天皇からそれ以前の天皇は実体が証明されておりません。中国の史書に残っている日本の王の名はおなじみの卑弥呼と讚、珍、済、與、武などで天皇号とは合致しておりません。

だいたい日本に漢字が渡来したのが継体天皇の頃の四世紀から五世紀ですから、それ以前には日本に文字がない以上漢字の天皇の名前はつけ様がないでしょう。神武から二十五代の武烈天皇までは後世の人がつくり出した名前で、八世紀の終わり頃「淡海おとあの三船みふね」がつくり出した名前と云われています。ですから架空のみかどが東征

する筈がなく、大入島に寄港する筈がありません。巨巖がそびえていても御船をつないだ史実はなく、みもいの古井もそれという井戸はありますが山水がしみ出る程度で清水は湧いておりません。

この様にもともと歌詞が正しくないのに、正しい歌詞を歌いましょうと云うのはナンセンスです。だからと云って私は母校の校歌をけなすつもりはありません。美文調は受け入れております。ただあまりにも「武だ武だ」と云うと「ほかのボロがでますよ」と云う事を云いたいです。

八波先生は立派な方だと思えますが歌詞が神がかっています。日本はあまりにも神がかり過ぎて国をあやまりました。もう「武」はあきらめて、そっとした方がよろしいのではないでしょうか。私は「武にもどせ」と云う要求に対し毅然として拒否しつけてきた歴代の校長、教職員に敬意を払いたい。

私は同窓会が学校の「自治」を無視して「武」にかえるよう強要するのは好ましくないとすることも一つの理由として同窓会の会計のあり方を指摘したい。

同窓会を運営する収入は新入生の会費年約一〇〇万円

(三、六〇〇円×二七四名)のみでまかなわれています。そしてそれと同額の一〇〇万円が関東、関西、大分の同窓会に助成金、役員の出席旅費、祝儀費として支出されています。つまり同窓会は卒業生の負担なしで新入生の負担のみによって運営されているのです。甲子園出場や馬場の松復元の寄付は別会計です。同窓会が会の費用を新入生に丸投げしているのはおかしいではありませんか。新入生の会費は在学中の活動に支出し同窓会の運営は卒業生の会費によってまかなうべきだと思います。もうそろそろ金は出さずに口だけ出すのは止めようではありませんか。

同窓会員の中には「鶴城の進学成績が悪い、学校は何をしてるんだ」と非難する人がいます。たしかにそうですがその原因は管内中学の優秀生が他市の進学校に行くのが最大の原因です。これは規制されていますが抜け道があつて守れませんでした。それで改正されて再来年から県下一校区になり、どの高校でも受験できるようにになりました。そうなれば鶴城はますます進学校と云う看板を維持するのがきびしくなるでしょう。少子化も進みます。生徒数が減少すれば四高校が統合した三重総合

高校のように鶴岡・豊南・鶴城の統合と云うことになりかねません。そのとき鶴城の校歌が残るでしょうか。名門大分上野丘高校同窓会は進学支援資金を募金し、進学校維持対策に早くからとり組んでいます。鶴城同窓会は総会で決まっても募金は具体化しておりません。同窓会は「技だ武だ」とうつつをぬかすより募金に早急にとりくんで校歌を残すためにはまず鶴城高校を残すよう努力すべきではありませんか。

せめて広報誌の「馬場の松」には「正しい校歌を歌いましょう」より、募金の呼びかけをして欲しかった。

蒲江の山本安喜正あきまささんは鶴城に三千万円寄付して下さいました。同窓会はこのような人の心を無にしてはならないと思います。



(鶴城高校と馬場の松・明治44年)